

北山C遺跡 第5次 (No, 3)

○8月31日の現地説明会には多くのご参加をいただき、ありがとうございました。

今回は、当日も見ていただいた遺構がどうやって掘削されたのか紹介しますぞ。



北山C遺跡では多くの古墳が見つかっており、左の写真の溝は古墳の周囲にほられた周溝しゅうこうと考えられます。

規模の大きな遺構のため、大型の道具も使って掘削に取りかかりました。

周溝を掘ったときに出た土は古墳の盛り土として使ったと考えられておるんじゃよ。



掘削を進めていくと、土の中から土器などの遺物が出ることがあります。

大きな破片やまとまった形で出土したものについては、写真のようにきれいに形を出しつつ掘削します。

どんな道具を使っても、土色や遺物に注意して少しずつ丁寧に進めるのが大事じゃな。



ほるぞうさん



<土師器>



<須恵器>

土器をきれいに出した状態です。左が土師器はじき、右が須恵器とよばれる土器ですが、色の違いがおわかりいただけるでしょうか。

土師器は野焼き、須恵器は窯で焼かれた土器で、用途に合わせて使い分けられていたようじゃ。

土器は取り上げた後に洗浄し、接合して器種の特長や特徴の観察などやすることはたくさんですぞ。





あぜを残しての掘削

また、遺構の掘削にあたっては、左の写真のようにあぜ（ベルトともいう）を残して、堆積した土を観察しながら掘削をすすめることがあります。



分層されたあぜ

左の写真は、土色や土のしまり具合の違いなどを観察して線引きを行ったところ（分層といいます）

土層（土の堆積状況）は、溝がどのように埋まっていったのかということや、他の遺構が絡んでいないかということなど、遺構、ひいては遺跡の全容を考える上で重要な資料となるため、慎重に検討を加えつつ分層します。



撮影前に念入りに清掃します。

土層や重要な遺物については写真や図面でも記録を残します。

調査終了後は、ここに道路が建設されて、遺跡の様子は二度と見られなくなるだけに記録は確実に行わなければならない。



【問い合わせ先】

三重県埋蔵文化財センター 調査研究3課 四日市整理所
〒512-8064 三重県四日市市伊坂町126-1
電話番号：059-363-3195/ファックス：059-363-3196
E-mail：maibun@pref.mie.jp